

Title	人類学的表現の新地平を求めて：映像とアートが紡ぐ記録と表現の新たな関係：感情の人類学：映像からのアプローチ
Sub Title	Frontiers of anthropological expression : towards a new relationship between observation and expression using visual images and other art forms : anthropological approaches to emotion
Author	Mohácsi, Gergely
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム人文科学分野論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2009
Jtitle	活動報告書 Vol.3, (2009.) ,p.30- 30
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	第2章：シンポジウム等の活動報告
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002002-20100300-0030

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

人類学的表現の新地平を求めて—映像とアートが紡ぐ記録と表現の新たな関係— Frontiers of Anthropological Expression –Towards a New Relationship between Observation and Expression Using Visual Images and Other Art Forms—

感情の人類学：映像からのアプローチ Anthropological Approaches to Emotion

開催日 2009年12月15-16日

企画 宮坂敬造 (哲学・文化人類学班)

講演者 Karl G. Heider (サウス・キャロライナ大学)、橋本順一 (慶應義塾大学)、大杉高司 (一橋大学)、新井一寛 (京都大学)、大石高典 (京都大学)

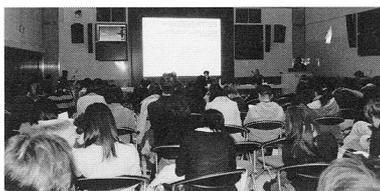
6

2009年12月15～16日、哲学・文化人類学班の主催でサウス・キャロライナ大学の Karl G. Heider 教授をお迎えして2日間にわたり講演会が開かれた。チームリーダーの宮坂敬造教授 (慶應義塾大学) が企画し、司会を務めた初日の公開シンポジウムは「映像記録とアートの感性」と題し、約140名の参加者を得て盛況であった。Loughborough University の Sarah Pink 教授による“Walking, Anthropology, Art, and Documentary Practice”では、人類学者のフィールドワークと映像というアートフォームの関係が、歩くことの身体経験を中心に論じられた。その後、Karl G. Heider 教授による基調講演“Rethinking Emotion in the Ethnographic Film Dead Birds”では、映像人類学の代表作品である『Dead Birds』(1963年)のニューギニアでの現場撮影に関わった Heider 氏が、過去の映像アーカイブ作品の表現手法の信憑性を現在の視点から再評価し、「感情」の映像による異文化間伝達の可能性をめぐって、映像人類学の理論的考察を報告した。続く討論では、橋本順一氏 (慶應義塾大学) が芸術批評、大杉高司氏 (一橋大学) が人類学批判の観点を加え、感性の映像表現における政治性について熱い議論が交わされた。

2日目は、前日の課題をもとに「感情の人類学：映像からのアプローチ」をテーマに研究セミナーが催され、より専門的な討議が展開された。Heider 教授は“The Significance of An-

thropology of Emotion in Visual Anthropological Understanding”というタイトルで、映像人類学の「感情」への深まる関心を検討した上で、マッピングという自らの分析手法を詳細に紹介した。最後に、発表者新井一寛氏 (京都大学) と、指摘討論者大石高典氏 (京都大学) が、実際にフィールドで撮影する際に直面する感情の捉え方について方法論的な討論を行った。総じて2日間のプログラムは、映像人類学の原光景を振り返りながら、フィールド映像記録と表現の問題を、学術映像とアートの間に横たわる諸問題と突き合わせて、学際的な再検討を進める有意義な機会となった。(モハーチ・ゲルゲイ)

Organized by the Philosophy and Cultural Anthropology Group, a two day event was held at the Mita Campus of Keio University on December 15th and 16th 2009 focusing on the role of *Emotion in Ethnographic Filming*. Two fascinating lectures were given by pioneernig visual anthropologist Karl G. Heider (University of South Carolina) followed by a heated debate on the politics of visual representation at the public symposium of the first day, and an advanced seminar on methodological issues on the second day. The meeting surpassed all expectations with more than 140 participants.



慶應義塾大学グローバルCOEプログラム
論理と感性の先端的教育研究拠点

慶應義塾大学 CARLS 哲学・文化人類学シンポジウム
Frontiers of Anthropological Expression
Towards a New Relationship between Observation and Expression Using Visual Images and Other Art Forms
人類学的表現の新地平を求めて
—映像とアートが紡ぐ記録と表現の新たな関係—

日時 2009年12月15日(火) 18:00-19:30
場所 慶應義塾大学三田キャンパス・東郷館 G-206 Lab. <http://www.carls.keio.ac.jp/>

今回の企画では、映像人類学の歴史を振り返りながら、フィールド映像記録と表現の問題を、学術映像・アーカイブの観点から検討し、今後の人類学における映像の役割を再考する。また、今回の企画では、映像記録と表現の問題を、学術映像・アーカイブの観点から検討し、今後の人類学における映像の役割を再考する。また、今回の企画では、映像記録と表現の問題を、学術映像・アーカイブの観点から検討し、今後の人類学における映像の役割を再考する。

2009年12月15日(火)
シンポジウム「映像記録とアートの感性」
18:00 基調講演 Karl Heider (University of South Carolina)
Rethinking Emotion in the Ethnographic Film Dead Birds
討論司会 橋本順一 (慶應義塾大学)、大杉高司 (一橋大学)
19:15 討論 司会 宮坂敬造 (慶應義塾大学)

公費無料・事前登録は不要

備考 本講演会は事前登録を要するが、参加費は無料です。また、本講演会は、映像記録と表現の問題を、学術映像・アーカイブの観点から検討し、今後の人類学における映像の役割を再考する。また、今回の企画では、映像記録と表現の問題を、学術映像・アーカイブの観点から検討し、今後の人類学における映像の役割を再考する。

主催 慶應義塾大学グローバルCOEプログラム
企画 慶應義塾大学 CARLS 哲学・文化人類学シンポジウム
協賛 慶應義塾大学三田キャンパス・東郷館 G-206 Lab. <http://www.carls.keio.ac.jp/>

慶應義塾大学グローバルCOEプログラム
論理と感性の先端的教育研究拠点

慶應義塾大学 CARLS 哲学・文化人類学シンポジウム
Anthropological Approaches to Emotion
感情の人類学：映像からのアプローチ

日時 2009年12月16日(水) 9:30-12:20
場所 慶應義塾大学三田キャンパス・東郷館 G-206 Lab. <http://www.carls.keio.ac.jp/>

今回の企画では、映像人類学の歴史を振り返りながら、フィールド映像記録と表現の問題を、学術映像・アーカイブの観点から検討し、今後の人類学における映像の役割を再考する。また、今回の企画では、映像記録と表現の問題を、学術映像・アーカイブの観点から検討し、今後の人類学における映像の役割を再考する。

The goal of today's seminar is to look at the ethnography of emotion through an understanding of visual ethnography which is based on the ethnography of documentary and of film of ethnography. The objective is to see the new development in visual ethnography will be discussed and further elaborated by the case of religious emotion.

Prof. Karl G. Heider (サウス・キャロライナ大学・文化および人類学)
"The Significance of Anthropology of Emotion in Visual Anthropological Understanding"

新井一寛 (京都大学・宗教学・民俗人類学)
「宗教感情を捉える映像記録の条件」

討論討論者 大石高典 (京都大学・社会学・社会人類学)

司会・コーディネーター 宮坂敬造 (慶應義塾大学・文化人類学)

公費無料・事前登録は不要

主催 慶應義塾大学、文化人類学シンポジウム、哲学・文化人類学シンポジウム
協賛 慶應義塾大学三田キャンパス・東郷館 G-206 Lab. <http://www.carls.keio.ac.jp/>

●お問い合わせ●
慶應義塾大学 文化人類学シンポジウム事務局
〒223-8581 慶應義塾大学三田キャンパス
TEL 045-556-1177